「こぼれる」

○　梗概

長く不妊治療をしていた産婦人科医の猪俣佐和（３８）に、待望の妊娠が発覚した。何年も苦労していたので、夫婦ともに大喜びであった。夫の猪俣渚（３６）は小説家で、ワードセンスのない佐和に代わって、どんな名前にしようか楽しみに考えていた。

しかし、妊娠初期の検査で、子宮頸がんにかかっていることが見つかる。産婦人科医として、病状を分析できる佐和は、治療をするには子供をあきらめなくてはならないことをわかっていた。待望の妊娠をあきらめたくない佐和は、同じ産婦人科医である父親に、治療より子供の命を優先したいと相談に行く。

実家の産婦人科医院から妊婦姿で出てきた合唱部の後輩長谷川みずほ（３７）と偶然再開する佐和。みずほは三人目の妊娠だ。事情を知らないみずほは「産婦人科医されているのであれば、自分で一人くらい産んでおくといいと思いますけどね」「狙って作ったらす

ぐ妊娠して」「出産はリミットありますからね！」などと言う。佐和は欲しくてもなかなかできない葛藤ののち、やっと授かったら病気が見つかって子供も今後の妊娠もあきらめなくてはいけない状況であるのに。

産婦人科医の父親に、なんとかぎりぎりのタイミングで帝王切開してくれないかと頼むが、父親は「俺にとって、お前は娘なんだ。まだ見ぬ孫より、今いる娘の方がかわいいんだよ」と、標準治療を受けるように説得する。

自宅に戻った佐和は、渚にがんになったことを告白する。子供をあきらめざるをえないこと、この後大変な治療が始まることにショックを受ける渚。子宮頸がんはHPVウイルスが原因のがんであり、感染経路は男性からであることを調べて知った渚は、「俺のせいで、佐和さんの命を脅かして、子供を殺すことになったってこと？」と、自身の責任も重く受け止める。佐和は、妊娠を中断し、子宮を取り、治療をすることを決意し手術に臨む。

○　登場人物

猪俣佐和（３８）産婦人科医

猪俣渚（３６）佐和の夫

上野悠里（４２）看護師

琴吹俊之（５５）産婦人科医長

長谷川みずほ（３７）佐和の地元の後輩

長谷川蓮（５）みずほの子

放射線技師

看護師Ａ

看護師Ｂ

猪俣清貴（６２）佐和の父　産婦人科医

猪俣理恵子（５０）佐和の母　遺影

鷺沢（４５）麻酔科医

看護師Ｃ

○藤原大附属病院・外観

大規模な病院に、多くの患者が出入りする。

○同・内

広い待合には多くの人。

婦人科の札。

○婦人科診療室・内

自分のお腹にエコーを当てている猪俣佐和（３８）、それを見ている上野悠里（４２）。

佐和「あっ」

エコーの白黒の画面。

佐和を見る悠里。

佐和「妊娠してる、うわあああやったー」

白黒のエコー画面には、白い袋状の胎嚢が写っている。

悠里「うわー、よかったですねえ、先生・・・不妊治療長かったですもんね」

佐和「うん、本当によかった、胎嚢確認！」
悠里「おめでとうございます」
笑顔の二人。
悠里「妊娠初期検査セットどうしますか？血液検査と子宮頸がん検査」
佐和「あ、今やっちゃいます。オーダー入れるんで、上野さん採血お願いしてもいいですか？採血の鬼上野さんにやってもらいたいです！」
悠里「鬼ってなんですか鬼って」
佐和「達人ていう意味ですよ」
悠里「佐和先生の方が難易度高い採血こなしてるじゃないですか」
佐和「立場上仕方なくですー、私末端冷え性だから、採血向いてないんですよ。指、冷たいって患者さんからも言われちゃうし」
悠里「私は指先ぽかぽかタイプですね」
笑顔の悠里。
おなかのジェルを拭き、整える佐和。

佐和、パソコンで検査のオーダーを入れる。

佐和「えーっと、血液型、不規則抗体、貧血、血小板数」

オーダーを入れていく佐和。

佐和「梅毒、B型肝炎、C型肝炎、風疹、HIV、トキソプラズマ・・・子宮頸がん。よし」

エコーの写真をプリントアウトして微笑む佐和。

佐和、採血にそなえる。

採血の準備をする悠里。

悠里「では猪俣佐和さん、採血します。2本とりますねー」

ボトルの名前を確認する悠里。

駆血帯を巻く悠里。

悠里「ちくっとしますよー」

顔を歪める佐和。

悠里「はいおっけー。検査回しときます」

駆血帯を外す。

トレーに、猪俣佐和と書かれた2本の
採血が転がる。
佐和「ありがとうございました」
佐和、圧迫止血をしている。
笑顔の佐和、エコー写真を見る。

○公園　（夕）
私服で帰宅中の佐和。
ふと、足を止める。
親子連れや子供が遊んでいる。
まぶしげに見る佐和。
妊婦が歩いている。
目で追う佐和。
走る小学生を見る佐和。
自分のお腹を触る佐和。
カバンからエコー写真を取り出す。
佐和「私のお腹に来てくれてありがとうね。
これからよろしくね」
お腹をさすりながら話しかける。

○猪俣邸・外観（夜）

築浅の三階建戸建て。

一階のガレージには小型車と自転車２台が入っている。

二階のリビングに灯りが付いている。

○同・内（夜）

猪俣渚（３６）がグラタンをダイニングに運ぶ。

料理が並んでいる。

テーブルセットされたダイニングテーブルにグラタンを置く。

座っている佐和。

猪俣「おまたせー」

佐和「やったー！なぎのグラタン大好物！おいしそう」

猪俣「今日はお祝いだからね。まだまだこれからなのはわかってますけど、ひとまず」

グラスにジュースを入れる。

猪俣「おめでとう！」

佐和「やった〜！」

グラスを当てる二人。

佐和「なぎも、大変だったよね不妊治療」

猪俣「でも、佐和さんに比べればたいした

ことないよ。佐和さんは自分の病院で採

卵とかできたから、ある程度融通聞いた

のかもしれないけど、不妊治療のために

仕事辞める女性がいるってのも納得の大

変さ」

佐和「排卵誘発して、タイミングみて採卵だ

からね。成熟してないと、卵子がとれな

いから、そのスケジュールがね」

猪俣「今が三月でしょ？え？十一月には子供

に会えるの？信じられない、すぐだよ！」

佐和「そうだよー、楽しみだよね。どういう

子がでてくるんだろうね」

猪俣「どっちに似ても、色白だよね」

佐和「あはは、確かに。日焼けと海注意だね」

猪俣「海は長袖必須！色白は日焼け大変だか

らね」

佐和「はい」

エコー写真を渡す佐和。

エコー写真を見る猪俣。

猪俣「まだ、なんだかわからないや」

佐和「そうだよね。まだ袋みたいなかんじ。これから細胞分裂して、人間らしくなっていくよ。でも、ここにいるんだって思うと不思議」

お腹を触る佐和。

猪俣「佐和さんは産婦人科医だから見慣れてるだろうけど、これがなんなのか僕にはわからないけど、どうしよう、なんか感動する」

佐和「そりゃ見慣れてるけど、いつも人のものだった。でもこれが自分のお腹の中にあるって思うと、もう、なんていうか」

お腹を触る佐和。

佐和「うれしい。本当に」

猪俣「うん」

佐和「産婦人科医的には、まだ初期流産の可

能性とかあるからっていうのはわかってるんだけどね。でも、自分の体に他の命があるのって、待ち望んだ子供がいるって思うと、舞い上がっちゃうね」

猪俣「ふふ。不妊治療大変だったけど、もう、楽しみしかないね。ありがとう佐和さん」

佐和「うん。安定期まで、いや出産まで、うう、出産しても、私はこの子を守るよ」

猪俣「うん。俺も、佐和さんと子供を守るよ」

佐和「食べよ食べよ。グラタンなら食べれるけど、しばらくは生物とか気をつけないといけないんだよね。お酒も」

猪俣「妊娠は変わってあげれないけど、僕も一緒に我慢するよ。お刺身と、お酒と、コーヒーかな」

佐和「べつにいいのに」

猪俣「何かやらせてよ。願掛けも含めて。名前どうする？性別は？」

佐和「なぎ、まだ胎嚢状態だよ。性別はもっと人間の形にならないとわからないよ」

猪俣「そっか。どっちでもいいけど、名前は考えとかないと」
佐和「そういうセンス、私にない気がするから、なぎが考えてよ」
猪俣「え？いいの？」
佐和「小説家でしょ。わたしよりは言葉のセンスあると思うよ」
猪俣「小説は書けるけど、名前か～、うーん、責任重大だなあ。その子の一生のものだもんね」
佐和「男女どちらでも使えるような、ジェンダーレスな名前とかがいいかな。性自認に関わらず使えるようなね」
猪俣「そうだね。どんな子が生まれても、生きにくさはすこしでも取り払って、自由に生きていけるようにしてあげたいね」
笑い合う二人。

○病院・内
廊下で妊婦とすれ違う佐和。

妊婦とその夫が楽しそうに歩いている。
その二人を笑顔で見ている佐和。
悠里が通りかかる。
悠里「猪俣先生、妊婦が目に留まっちゃいます？」
佐和「へへ。今までは仕事で見ていた妊婦姿でも、私もまもなくこうなるのかなと思うと、なんか見ちゃうよね。どこの服着てるのかなとか。でも、仕事柄、妊娠は何が起こるかわからないのはわかってますよ」
悠里「先生も、高齢出産になりますよね。初期の化学流産は、先生の年齢だと確率高くはなりますからね」
佐和「そうなんだよね。気をつけようがないけど、気をつけます」
悠里「高齢出産だと、精神的に成熟しているのと、経済的にも安定しているので、若い頃よりいいなんて聞きますよ」
佐和「身体的には若いに越したことはないけ

ど、まあ、精神的に落ち着いているっていうメリットはあるよね。もっと早く子供欲しかったけど、この年齢になってしまった。不妊治療に時間もお金もかかってしまった。でも、できてよかったー」

グータッチする二人。

笑い合う二人。

○診察室・内（夜）

PC 作業をしている佐和。

PC の画面に電子カルテ。

猪俣佐和の文字。

検査結果の欄に印が付いている。

開ける佐和。

目を見張る。

佐和「え？SCC？」

呆然とする佐和。

佐和「なんで・・・私が子宮頸がん？なんで今・・・なんで」

震える手。

院内携帯で検査部門に電話する佐和。

佐和「あ、お疲れ様です、追加で検査増やしたいのですが、・・・はい、腫瘍マーカーを追加してください」

電話を切る。

佐和「なんで・・・、CTの予約をいれなきゃ・・・なんで」

動揺しながら、PCで予約を入れていく。

○CT室・内

CTに横たわる佐和。

点滴が刺さっている。

放射線技師が行き来している。

放射線技師「造影剤の点滴入れまーす、からだあったかくなりまーす」

顔をしかめる佐和。

放射線技師「では撮影します」

出ていく放射線技師。

CT 機械「おおきくすって、息を止めてください」

不安な表情で指示に従う佐和。

目を瞑り、息を止める。

機械の音が鳴り響く。

○会議室・外観

使用中の文字。

○会議室・内

琴吹俊之（55）と佐和が対峙している。

二人の手元には、紙の束とノートPC。

細胞がアップになった紙を見る琴吹。

琴吹「子宮頸がん・・・進行がんか。扁平上皮癌」

苦しい表情の佐和。

佐和「こんなことありますか。私ずっと不妊治療してたのに。頸がん健診だって受けてましたよ」

沈痛な面持ちで資料を見る琴吹。

琴吹「うん。・・・わかってる。ああ、浸潤してるのか。・・・猪俣、わかってるよね」

佐和「・・・わかってますよ！」

立ち上がり、怒鳴る佐和。

佐和「これじゃ、これじゃ全摘するしかないじゃないですか！やっと妊娠成立したのに！胎嚢確認したんですよ！」

険しい表情の琴吹。

プリントアウトしたCTの骨盤内写真を机に置く佐和。

佐和「トラケラクトミーの範囲も超えてます。多分やっても術中病理診断で全摘の判断です・・・」

ノートパソコンで、CTスキャン画像を拡大して見る佐和。

白く映る癌の部分。

琴吹「異形成から時間をかけて進行すると言われているけど、ほんの数ヶ月で進んじ

ゃう人もいるんだよなあ。そこは俺たち無力だよ」

天をあおぐ琴吹。

琴吹「HPVウイルスの感染が継続したら、異形成になって、そうなっちゃうと、外科的なこと以外現代医学でできることはない。だから、ワクチンを打つべきなんだよ。でも、そのワクチンも、この十数年だからな。打てるようになったのは。取りこぼしてる層は未だ多い」

佐和「・・・わかってますよ。私だって何人も見てきたし、先週も十時間の広汎子宮全摘オペしたばかりですよ。・・・あれは大変な手術です。ウチで最大の手術です。それに、術後の重大な合併症も考えられる。患者さんに何十回も説明してきました。今後の生活に制限がかかりますって。はっ、今度は自分が受ける側ですよ。子宮も卵巣も、この状態では温存できない・・・」

ノートPCのCT画像を見ながら、白く光る部分を計測する琴吹。

琴吹「この段階だと、1b3から2A1かな。妊娠の継続と妊孕性の温存はできない。全摘。そのあと、CCRT追加かな。腫瘍内科と、放射線科とのご相談だ」

机にあたる佐和。

琴吹「どうする、うちでやるか？・・・きまずいなら別の病院でも。まあ、この手術のできる規模の病院はたいてい知り合いがいるだろうけど」

佐和「・・・少し考えます」

佐和を見る琴吹。

うつむく佐和、ため息をつく。

佐和「やっと妊娠したのに。同時に頸がん発見てなんなんですかね。やっとできた子を失い、今後の妊娠ももう不可能ですよ」

琴吹「シビアな言い方かもしれないけど、俺、三例目だわ。胎児の成長を待ってられなかったの。これじゃ、出産を待って

手術は無理だ」

佐和、俯いている。

琴吹「このままお腹で育てていたら、癌が転移する。鼠蹊リンパ節からやられて、大腸、膀胱、肝臓、肺」

佐和「わかっています」

琴吹「子供に影響出るかもしれない。もし子供が無事でも出てくる頃には、お前の余命は1年てとこか」

佐和「その1年も、まともに動けない1年です」

琴吹「でも、いま手術すれば、五年生存率は90%だ。うちでやるなら最短で来月の手術だ。麻酔科と腫瘍内科と放射線科と打ち合わせしとくか？あと、俺腕いいんだよ。」

佐和「知ってますよ。琴吹先生、神経温存の排尿機能成績良好ですもんね。はあ、しかしそれを自分が受けると思うと」

琴吹「掘るからな。骨盤内を。広汎性子宮全

摘出術。」

佐和「散々やりましたけど、医師として、患者に言っていたことがすべて、今自分にブーメランですね。良くも悪くも」

うつむく佐和。

佐和「子供が、癌を教えてくれたなんて、とても思えないですよ」

苦悶の表情。

琴吹、声がかけられない。

○公園　（夕）

ベンチに座り、噴水を見る佐和。

カバンから、エコーの写真を出す。

ベビーカーを押す夫婦が目に止まる。

走る子供を追いかける母親に目が止まる。

子供と犬と散歩する親子に目が止まる。

涙が堪えきれない。

エコー写真を見ながら声を抑えて泣く佐和。

○藤原大附属病院・外観

車寄せにはタクシーが列を作っている。

多くの患者が出入りしている。

○同・産婦人科医局

看護師たちが申し送りをしている。

ホワイトボードの医師出勤欄。

猪俣の札が休みのゾーンにいる。

悠里がそれを見ている。

悠里「猪俣先生、休み？」

看護師A「ほんとだ、どうしたんですかね」

看護師B「体調不良かな？妊娠初期は大変だからねえ」

悠里「さすがの猪俣先生も、妊娠には勝てないか」

看護師A「体力自慢ですもんね。夜中の緊急オペと言ったら猪俣先生」

悠里「産婦人科は昼も夜もないからね～。お産は待ってくれないし」

話しながら持ち場に流れていく。
悠里、猪俣の札を眺める。

○猪俣邸・内
リビングで簡単な荷造りをしている佐和。
猪俣がノートに何かを書きながら入ってくる。
猪俣「猪俣凛、猪俣奈央、猪俣蓮・・・佐和さんが二文字だから、二文字で男女どちらでも使えそうな名前を考えているんだ。・・・あ、猪俣海。猪俣ルカとか・・・？」
メモをする。
佐和「なぎ、私ちょっと実家に顔を出してこようと思う」
猪俣「佐和さん、急に実家なんてめずらしいね。どうかした？俺も行こうか？」
荷造りの手を止める佐和。
佐和「・・・うん、ほら、一応、妊娠の報告

もかねて」

心配そうに見る猪俣。

佐和「まだ妊娠初期なんだけどさ、ほら、うち親産婦人科医だし」

心配そうに見る猪俣。

佐和「・・・いや、妊娠の話だけじゃなくてさ、有給たまってて。有給って使わないといけないんだって。それで、使えって言われて。二日くらい行ってこようかなって」

佐和、猪俣と目を合わせない。

心配そうに見る猪俣。

猪俣「一緒に行こうか？」

猪俣を見ない佐和。

猪俣「体きつくない？新幹線あるけど、長野は遠いよ」

佐和「・・・大丈夫。私あまり悪阻強くないみたいで。今の所動けるし、すぐ帰ってくるよ」

笑顔を見せる佐和。

心配そうな猪俣。

佐和「着いたら連絡するね。野沢菜漬買ってくるよ。好きでしょ？」

猪俣「うん・・・気を付けて」

○長野駅・外観

観光客や人々が出入りしている。

荷物をもって歩く佐和。

市バスに乗り込む佐和。

○バス・内

椅子に座る佐和。

バスの窓から、街を見る佐和。

遠くに北アルプスが見えている。

お腹をさすり、厳しい表情。

○猪俣産婦人科・外観

古い建物。

歩いて佐和がたどりつく。

駐輪場にはたくさんのキャリー付き自

転車。
長谷川蓮（5）を連れた妊婦長谷川みずほ（37）が扉から出てくる。
その妊婦と目が合う佐和。
みずほ「あ・・・もしかして佐和先輩？」
佐和「えっ？」
みずほ「佐和先輩ですよね？私、井上みずほです！合唱部の！今は長谷川です！」
佐和「みずほ？井上みずほ？え、ひさしぶり！あ、今妊婦なの？子供ちゃん？」
みずほ「にんぷっぷですよ～。この子は三人目なんです。この子の上にもう一人いて」
佐和「うわ～すごいね！三人目か～」
みずほ「佐和先輩も、猪俣先生と同じ産婦人科医になったって聞きましたよ。ここに通っていたらいつか会うかもしれないなっておもっていたんです」
佐和「そっか。この辺、お産やってるところはここくらいだもんね」

みずほ「この辺の子はみんな猪俣先生がとりあげていますよ。うちも三人とも」
佐和「そうなんだね。今時三人出産はすごいよ！」
みずほ「合唱部のメンバーで、地元に残ってる子はほとんど今子育て中ですね。たまに会ったりするんですよ」
佐和「うん、たまに連絡くるね。私、東京だし、結構忙しい仕事してるから」
みずほ「そうですよね。あ、国道沿いにあたしいファミレスできたんです。よかったら少しいきませんか？私検診終わって帰るだけなんで」
少し考える佐和。
佐和「・・・うん、行こうか。新しいファミレス？なんか帰ってくるたびに店が変わってて」
みずほ「この辺も変わりましたからね。すぐ近くです」
歩き出す三人。

○ファミレス・内

蓮が塗り絵をしている。

テーブルにはドリンクバーのオレンジジュースとポテト、パフェ。

佐和「そっか、みずほは地元の人と結婚してたんだね」

みずほ「そうなんですよ～。東京にあこがれてましたけど、結局東京で就職するほどの能力なくて。あと、地元があってるかな。東京は観光だけで十分」

佐和「まあ、地元のほうが楽だよね」

みずほ「佐和先輩は、東京の大学に行って、産婦人科医になったってききましたけど、ご結婚は？」

佐和「うん、してるよ」

みずほ「えー！バリキャリの夫はバリキャリですか？ドラマみたい。何してる人なんですか？」

佐和「私バリキャリじゃないし。夫は小説書

いてる優しい人だよ」

みずほ「産婦人科医と小説家？すてきー！お子さんは？」

佐和の表情が固まる。

佐和、オレンジジュースを混ぜる。

佐和「あー、いないよ」

テーブルの下では、佐和の手はお腹にある。

みずほ「え？子供いないんですか？」

佐和「今、子供いない夫婦も多いし」

みずほ「産婦人科医されているのであれば、自分で一人くらい産んでおくといいと思いますけどね」

佐和「出産自体は、何百回も立ち会ってるよ」

みずほ「自分でやるのとは違いますよ～」

佐和「・・・そりゃそうだよね」

みずほ「私は二人とも、下から産んだんです。本当に陣痛が辛くて、またあれをやるのかと思うと恐ろしいですけど、そのあとにふにゃふにゃの新生児が出てく

ると思うともう楽しみで」

佐和「経膣分娩だったんだね」

みずほ「子供、かわいいですよ？今うち二人なんですけどね、下が五歳になるともう赤ちゃんじゃないから、なんか寂しくて、産めるうちにもう一人って思って。狙って作ったらすぐ妊娠して。うちの夫そういうとこあるんですよー」

佐和「そうなんだ。できる人はできるよね」

みずほ「先輩ならわかってると思いますけど、出産はリミットありますからね！今のうちですよ！今のうち！」

佐和「・・・そうだね。卵子の老化と、着床率の低下があるからね」

みずほ「妊娠はまだできても、育児は体力きつくなりますから！新生児は本当に大変で、一人目の時なんて、全然寝れなくて、夫と喧嘩しましたよ。おまえもっと手伝えよって」

佐和「・・・うん。そうなんだ、うらやまし

い」

話し続けるみずほに、うつろな表情で相槌を打つ佐和。

蓮は塗り絵をぬっている。

オレンジジュースをかき混ぜる佐和。

○猪俣実家・外観（夜）

猪俣産婦人科の裏手、日本家屋。

玄関は暗い。

鍵をあけて入っていく佐和。

佐和「ただいまー」

真っ暗な玄関、電気をつける。

佐和「お父さんまだなのかな」

中に上がる。

○同・居間（夜）

今には、小さな仏壇。

猪俣理恵子（５０）の遺影が飾られている。

佐和「・・・お母さん、ただいま」

遺影を見つめる佐和。

佐和「お母さん・・・・、助けてよ・・・・」

うつむく佐和。

猪俣清貴（６２）がどかどかと居間に入ってくる。

清貴「まいったまいった。緊急でカイザーだよ。おお、佐和、おかえり。急に帰ってくるって連絡くるから。」

佐和「お父さん、お疲れ様。ちょっと有給消化で休みが取れたから」

清貴「仕事は順調か？今回渚君は？」

佐和「うん、なぎは、仕事があるから私だけだよ。ちょっとお父さんに話があってさ」

佐和を見る清貴。

○同・食卓（夜）

つまみと、瓶ビールを飲む清貴。

唖然とした表情の清貴。

清貴「おまえ、何言ってるのかわかってるのか」

うつむく佐和。

佐和「私、なぎの子が欲しいんだ。どうしても」

清貴「そんなこと言ったって、お前あっての子供だろう？」

佐和「だって、子宮をとってしまったら、もう産めないんだよ」

清貴「トラケは？」

佐和「もう無理」

黙る清貴。

ビールを飲む。

清貴「俺にとって、お前は娘なんだ。まだ見ぬ孫より、今いる娘の方がかわいいんだよ」

黙る佐和。

清貴「とうてい同意できないし、賛成できないよ。治療を受けないで産むなんて。だいたい子供は産んだら終わりじゃないんだぞ」

佐和「だって・・・・どうしたらいいの。私

子供を、この子を産みたいよ。ずーっと不妊治療してやっと来てくれたんだよ」

清貴「渚くんには話したのか」

黙る佐和、首をふる。

ため息をつく清貴。

清貴「佐和一人の話じゃない。隠し通せることでもない。そもそも、婦人科医として治療しないなんて選択肢、与えられない。わかってるだろ」

佐和「それでも」

清貴「死ぬぞ。お前。帝王切開ギリギリまで持ち堪えて、出してから治療開始だと、5年生存率は2、30%というところじゃないのか。でも今治療すれば、5年生存率90%だぞ。全然違うんだよ」

佐和「出せるぎりぎりで、お父さんに帝王切開してもらって、そこから全摘して抗がん剤でたたいて、次の子は産めないかもしれないけど、なんとか」

清貴「おい」

うつむく佐和。

清貴「だめだよ。しっかりしろよ佐和、ぎりぎりって、子供に影響出るかもしれないんだよ。そもそも、無理なんだよ」

泣き出す佐和。

佐和「さっき、合唱部の後輩にあったんだけど、三人目だって。・・・狙ったらできたんだって」

清貴「佐和」

佐和「出産にはリミットがあるから先輩も一人くらい産んどいたほうがいいって」

清貴「佐和」

お腹に手を当てている佐和。

佐和「なんで？私何年も不妊治療して、やっと胎嚢確認できたんだよ？なんで三人とか得られる人もいるのに、私は望めないの？私が何をしたの？・・・前世でよっぽど悪いことしたのかな」

泣く佐和。

黙る清貴。

清貴「・・・本当にね。どうしても手に入らない人はいるんだよね。うちの病院も、不妊治療やってるからわかるよ」

佐和「私だって、わかってるよ。でも、欲しいんだよ。いま、お腹に来てくれてるんだよ」

黙る清貴。

佐和「大人になったら、当たり前に結婚して子供ができるんだと思っていたよ。私、なりたかった医者にもなれたよ。なぎと出会って結婚もできたよ。でも、妊娠だけずっとできなかった」

清貴「みんながみんな、全てを得られるわけじゃないんだよ」

佐和「望まない妊娠もたくさん見てきているよ。私は望んでるのに。そういう問題じゃないってわかってるけど、私は子供を迎え入れることができるのに。なんで」

清貴「俺は、佐和の命を優先してほしいよ。
死に急ぐのを、見過ごせない」
うつむく佐和。
お腹をなでる。
清貴「わかっているだろうけど、がん細胞は
転移する。一度体にできてしまったら、
これほど厄介なものはない。治療その
もののダメージもでかいのに、どこか
に転移してしまったら、都度大変な治
療をしていかないといけない」
佐和、うつむいている。
清貴「大変なことなんだよ」
清貴の目線の先に飾られた理恵子の遺
影。
清貴「お母さんだって、がんで大変だったの
に、なんで佐和まで・・・・」
佐和「子宮頸がんは、遺伝じゃないから」
清貴「そうだけど・・・そうだけど」
清貴、こぶしを強く握る。

○公園

噴水のある公園に、キッチンカーがいくつか出店している。

コーヒーのキッチンカーに並ぶ猪俣。

コーヒーを買っていると、後ろに琴吹。

猪俣「あ、佐和さんの上司の・・・偶然ですね」

琴吹「ああ、どうも。琴吹です。お久しぶりです、猪俣さん」

コーヒーを受け取りながら会釈する。

○同・ベンチ

噴水の前のベンチに座る、猪俣と琴吹。

猪俣「佐和さん、今実家に帰ってるんですよ。有給取れって職場に言われたって。今夜帰ってくるんですけどね」

琴吹「ああ、そうなんですよ。我々も、有給を年間五日は消化しないといけないものですから。猪俣はなかなかとらないから」

猪俣「そうなんですよね。でも、佐和さんこ

れから産休なんかもあるだろうし、消化できそうだとおもったんだけど」

目をみはる琴吹。

琴吹「そう、ですね」

猪俣「本人産婦人科医ですし、琴吹先生もいらっしゃるし、心配はしていないんですけど、出てくるまでは心配ですね」

目を伏せる琴吹。

琴吹「そう・・・ですね」

猪俣「早く出てきてほしいですよ。名前も今絶賛検討中なんですよ。佐和さんに、僕がつけてほしいって言われたんです」

琴吹「猪俣さん、小説書かれてるんですもんね。猪俣は、そういうセンスなさそうだから」

猪俣「そうなんですよ。佐和さんはセンスはないんです。でも、体力自慢で体は丈夫ですから。絶対安産ですよ」

琴吹「・・・妊娠出産は、何が起こるかわからないです・・・」

猪俣「そう・・・ですよね。気を引き締めて、支えたいと思います」
琴吹「猪俣、実家も産婦人科でしたよね」
猪俣「はい、長野でお父さんが産婦人科をやっています。分娩もやっているそうですよ。今、妊娠の報告に行っています」
琴吹「そう・・・ですか」
猪俣「僕たち夫婦は、ずっと子供が欲しくて、不妊治療もしていました。何年も。あれって、本当に大変ですよね」
琴吹「頑張ったからと言って結果が必ずしも出るものじゃないですからね」
猪俣「絶望的っていうか。ジャッジは毎回出るじゃないですか。生理が来るたびに、かわいそうで」
琴吹「子供ができるできないも、病気になるならないも、人間がコントロールできる範囲は本当にわずかで」
猪俣「そうですよね。誰かに定められた運命みたいな道筋を、歩いているように思う

んですが、やっぱり苦難というか、平坦な道は用意されていないなって思います」

コーヒーを飲む猪俣。

琴吹「小説家の視点という感じで、いいですね。でも、なんとなくわかります。定められた道を歩いてる感じ、ありますよね。苦痛でも、逃れられないというか」

猪俣「ちょっと懐妊ハイになってしゃべりすぎちゃいました」

琴吹「いえ、お話聞けて良かったです」

猪俣「ところで佐和さんて、職場でどういう感じなんですか？」

目を見張る琴吹。

笑う琴吹。

琴吹「猪俣のこと、すごい好きなんですね」

猪俣「佐和さん命なんです。僕にないものをたくさん持っていて。あ、あと生まれてくる子供も」

笑顔の猪俣。

目を細めて猪俣の笑顔を見る琴吹。

琴吹「猪俣は、幸せ者だなあ」

コーヒーを飲む琴吹。

子供が周囲を走り回っている。

走り回る子供達を、猪俣は目を細めて見ている。

○猪俣邸・外観（夜）

扉の前に泣いた顔の佐和。

手にはお土産の袋。

二階のリビングから灯りがこぼれている。

リビングの灯りを見つめる佐和。

扉の前で逡巡する佐和。

また、涙が溢れてくる。

とびらが開く。

猪俣「え？佐和さん？え？え？どうしたの？」

佐和「う・・・」

佐和、泣き出す。

猪俣、泣く佐和を抱き止める。

外は雨が降り出す。

○同・内

暖かいお茶を出す猪俣。

リビングのテーブルに座る佐和。

泣いた顔。

猪俣「佐和さん、どうしたの？」

佐和「・・・野沢菜漬け、買ってきたよ」

お土産のビニールを渡す。

猪俣「ありがとう」

佐和を気にしながら、受け取る。

猪俣「どうしたの？何かあった？」

佐和「あのね・・・言わないといけないこと

がある」

猪俣、不安げにぐっと力を込める。

佐和、猪俣を見れない。

佐和「今回実家に行っていたのは、お父さん

に相談のためだったの」

猪俣「・・・うん」

佐和「実は、子宮頸がんが見つかった」

猪俣「・・・え？誰に？」

佐和「私」

猪俣「子宮？がん？」

佐和「子宮頸がん。子宮の頸部という入り口のところにできる癌で、少し進行している」

不安な表情の猪俣。

猪俣「少し、進行？」

佐和「手術が必要なくらい進行している」

猪俣「え？大丈夫なんだよね？子供は？佐和さんも大丈夫なんだよね？」

うつむく佐和。

佐和「今の私の状態だと、ガイドライン上は子宮と付属器をすべて切除。その上で抗がん剤などの化学療法になる」

猪俣「それって、出産後？」

目を瞑る佐和。

唖然とする猪俣。

佐和「すみやかに」

目を見開く猪俣。

猪俣「何言ってるの・・・子供は・・・？」
佐和「妊娠を中断せざるを得ない」
黙る猪俣。
猪俣「なんで、なんでもっと早く言ってくれなかったの」
佐和を抱きしめる猪俣。
猪俣「佐和さん、一人で抱えて」
泣き出す猪俣。
猪俣「子供も大事だけど、佐和さんが一番大事だよ！一人で、一人で抱えないで。一緒にいるから」
佐和「うう・・・」
泣き出す佐和。
一緒に泣く猪俣。
佐和「今後、もう子供は望めないの。なぎの子供欲しかったのに」
猪俣「いいんだよ。佐和さんがいれば俺はそれでいい」
佐和「なぎに似た子を抱きたかったの」
猪俣「佐和さんさえいれば、俺は生きていけ

るよ」

佐和「この子を諦めざるをえない。やっと来てくれたのに」

猪俣「一生忘れないでいよう。少しの間でも来てくれた子を」

大泣きする佐和。

佐和を抱きしめて泣く猪俣。

窓の外は大雨。

○同　（朝）

リビングに朝日が差し込む。

ダイニングテーブルには、ノートPCを広げた猪俣。

テーブルには、数枚の紙と数冊の本、飲みかけのコーヒー。

昨夜と同じ格好で、寝ていない様子。

PCで何かを調べている。

猪俣「はあ・・・」

天を仰ぐ猪俣。

物音がした方を見る。

佐和が起きてくる。
やつれた様子。
猪俣「佐和さん、おはよう」
佐和「おはよう・・・ずっと起きてたの？」
猪俣「佐和さんは、子宮頸がんのことよく知ってると思うけど、俺、全然知らないから。どういうものなのか、調べられる範囲だけ」
佐和「私に聞いてくれてよかったのに」
うつむく猪俣。
猪俣「あのさ、ウイルス感染が原因でなる癌だって」
佐和「・・・・うん」
猪俣「性交渉で移るHPVウイルスが原因だって」
猪俣を見る佐和。
猪俣「俺のせい？」
佐和を見る猪俣。
猪俣「俺のせいで、佐和さんの命を脅かして、子供を殺すことになったってこと？」

佐和「・・・、HPVウイルスっていうのは、
どこにでもいるウイルスで」
猪俣「でも、性交渉しなければ感染しないん
だよね？俺のせいってことだよね？」
佐和、苦しい表情。
佐和「わからない。女性は一度は感染すると
言われているの。でも、通常は免疫で感
染は持続しない。免疫が落ちてたりする
と、感染が継続するの。そうすると、異
形成になり、その後癌化する。だから、
犯人探しができるものではないの、なぎ」
泣き出す猪俣。
猪俣「自分が無関係とは思えない。俺のせい
かもしれない。佐和さんを傷つけたくな
かったのに、なんなんだよ」
猪俣を抱きしめる佐和。
泣く猪俣。
佐和「あのね、お父さんのところに行ったの
は、治療しないで、ギリギリの時期まで
子供をお腹で育てて、お父さんに帝王切

開してもらおうと思ってたから」

顔をあげる猪俣。

佐和「出したらすぐ、治療すれば、いけるんじゃないかなって、カルテもって」

猪俣「そんな・・・」

佐和「お父さんに怒られちゃった。たとえできても、子供にも影響出るかもしれないし、私の余命も削っちゃうし」

猪俣「佐和さん・・・」

佐和「なにが原因なのか、考えちゃうよね。なぎかもしれないし、その前の元彼とかかもしれないとか。でも、HPVウイルスは、コンドームとかで防げる性感染症のレベルじゃないから」

猪俣「ワクチンで防げるって」

佐和「そう、唯一の対抗策がワクチン。それも、私の適応年齢の頃には、存在してなかった」

猪俣「俺にも、原因があるかもしれないっていう、強い楔が打ち込まれてるよ」

佐和「・・・これから、私は手術と、化学療法を行うことになると思う。術後は、合併症が出る可能性もあるし、制限しながら生きていくことになる。」

猪俣「うん」

佐和「化学療法では、髪も抜けるし、体重も落ちると思う。きつい治療になると思う。なぎに当たったりしてしまうかもしれない」

猪俣「いいよ。支えさせてよ。一緒にいるから」

佐和「・・・うん」

抱き合って泣く二人。

○藤原大附属病院・外観（朝）

タイトル「手術当日」

○同・病棟　（朝）

５０３病棟の電子プレート。

猪俣佐和の文字。

扉がノックされる。

悠里「おはようございます、猪俣先生。ご気分はいかがですか」

佐和「8時45分。時間ぴったりですね」

病院着の佐和。

猪俣にメッセージを送る佐和。

メッセージ佐和「迎えが来た。いってくるね」

メッセージ猪俣「頑張って！ずっと佐和さんのことを考えてるよ」

佐和「なぎ、即レスじゃん」

靴を履いて立ち上がる。

窓に歩いて行き、外を見る。

快晴の空。

決意の表情で、悠里に振り返る。

佐和「大丈夫です。下剤もばっちり。あとは、琴吹先生にお任せです」

悠里、切ない表情。

悠里「大丈夫です。寝てる間に全て、終わりますよ」

佐和「それ、いつも私が言ってるセリフ。さあ、手術室に行きましょうか」

歩き出す佐和。

○同　手術室　内

多くの人が準備をする手術室。

手術台に横になっている佐和。

琴平「気分は大丈夫か」

佐和「はい、先生にお任せします。今日はまな板の鯉ですよ」

鷺沢「猪俣先生よろしくお願いします。麻酔の鷺沢です。硬膜外麻酔からとっていきます。背中に針を刺します。横向きになって体を曲げてください」

佐和「はい」

体を曲げる佐和。

看護師C「支えます」

鷺沢「針入れますよー」

佐和の顔、ゆがむ。

鷺沢「入りました」

佐和、不安な表情。
麻酔のマスクが顔に置かれる。
目を瞑る佐和。
涙が一筋。

○同・外観（朝）
猪俣が病院を見ている。
腕時計を見る。
エコー写真を見る。
空を見上げる。
快晴の空。